

ヨーロッパ絵画にみる幼児発見の系譜とその背景 (3)

ルネサンスからロマン主義までの

藤田 博子

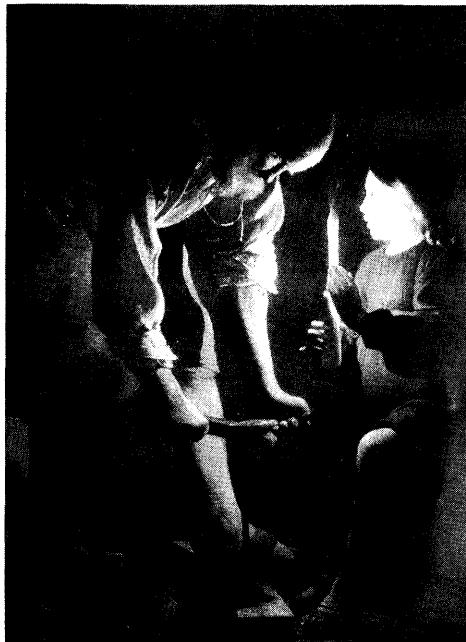
III. 北方ルネサンスとマニエリズム

2. フランス・ルネサンスからロマン主義まで
イタリア風 (*Mos Italicum*) はアルプスを越えて全ヨーロッパに吹き渡つたのであるが、なかでも、一五一年にフランソワ一世の招きでアルプスを越え、ロワール川近くのアンボワーズ城に住んだ、レオナルド・ダ・ヴィンチの影響は多大であるといわなければなるまい。ダ・ヴィンチはそこで死までの約三年間、宮殿設計を中心として、まだ、中世を抜け出すにいる建築家や芸術家たちに、イタリア・ルネサンスの新風を吹き込んだの

である。また、メディチ家からフランス王アンリIII世の妃として入嫁したカトリーヌ (Catherine de Medicis, 1517-98)、同じくメディチ家からアントワネットの妃として入嫁したマリー・ム・メディチ (Marie de medicis, 1573-1642) によつて、イタリア・ルネサンスの生活様式が持ち込まれた。このようにしてフランス王族とつながるロワール沿岸の城館や、パリ周辺の城館にはイタリア風がもてはやされた。フランス・ルネサンスの幕を開けとなる。この時代を代表する画家にラ・トゥール (Georges de La Tour, 1593-1652) がいる。写真—28

『大工の聖ヨセフ』の、端整で利発そうな幼児イエズス、ロウソクの火が光源ではあるが、まるで幼児の魂と叡智から光がやへへるようである。まるで輝かしい子ども贊歌といえよう。写真—29はシャンペーニュ(Philippe de Champaigne, 1622—74)による『仰掌する女兒の肖像』である。これは宗教画をばたれ、画家

▼28 ハ・ル・チャール『大工の聖ヨセフ』



▲29 シャンペーニュ『仰掌する女兒の肖像』



自身の愛娘が輝かに描かれている。彼はマリ・ド・メディチの御用画家であつた。

ハの時代、フランス・ルネッサンスはモンテニュ(Michel de Montaigne, 1533—92)、ラブレー(François Rabelais, 1494—1553)などの自然主義的、自由教育思想家を生み出したのであるが、ハのフランス・ル

ネッサンスの流れを汲む代表的な思想家が、子供の発見で名高い『エミール』(EMILE OU DE L'EDUCATION)の著者、ルソー (Jean Jacques Rousseau, 1712-78) である。『エミール』は、ロワール河岸のショノンソーの城館に住まう賢明な母親、ショノンソー夫人の望みに応えて草をなしたものであった。この著においてルソー



▲30 ヴィジェ=ルブラン
『王妃マリー・アントワネットの肖像』

文学の先駆者となり、その足跡を残している。

この時代、ルソーの思想的影響を受けた王妃マリー・アントワネット (Marie Antoinette, 1755-93) の肖像画を写真一30にあげよう。王妃の膝にはしつかりとおさな子が抱かれ、その母に甘え寄り添う王女、王子が帳を開く空っぽの搖籃は、生まれてすぐにみまかつたみどり児のものである。王妃のま

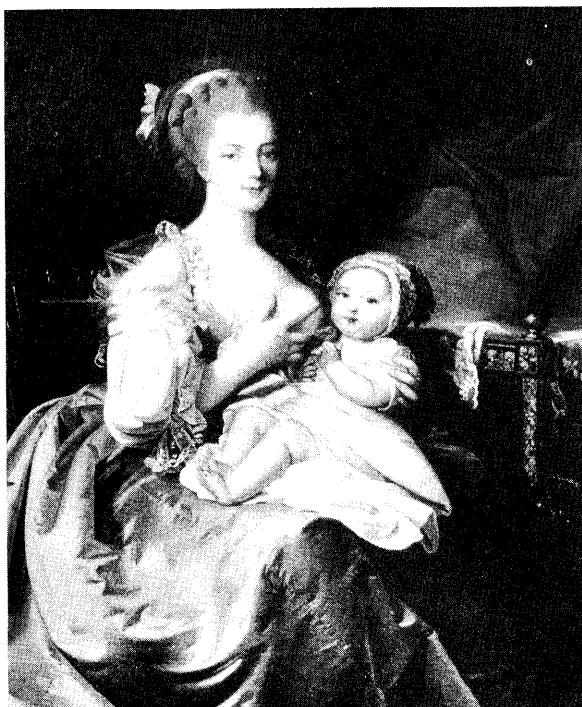
は、ルネッサンス・ヒューマニズムの精神にもとづいて、人間の自我の目覚め、人格の価値、幼児期の重要性、その教育可能性を説き、古代ギリシア以来の人間性善説に立脚して、「造物主の手を離れるとき、すべては善であるが、人間の手に渡ると、すべて悪となる」と、当時の誤った教育のあり方を指弾したのである。それに彼は、自然主義、ロマン主義

なれしには母たるもののは至福と、母なるものの哀しみが満ちてゐる。また、ルソーの「自然に還れ!」との教えは、王妃マリーアントワネットに、自然を重視したイギリス庭園を造らせ、自然のなかでの牧歌的な生活の至福を教えたのであつたが、皮肉にもルソーが煽動した、近

代自我、自由、人格の概念の自覚は、フランス革命の基礎を固め、マリーアントワネットは、この革命の露と消えるのである。

ルソーの影響で、貴族たちの間にもまた、聖母子画にかわる家庭画が流行してした。写真一31はモニエ(Jean

Laurent Mosnier, 1743 - 1808) の



▲31 モニエ

『児に乳をふくませる若い母親の肖像』

『児に乳をふくませる若い母親の肖像』である。当時の貴族社会では母親が自分の手で育児をし、授乳する風習はなかったであろう。この母子の美しい光景はルソーの人間教育の影響であるところえよう。母子ともに身も静かな淨福に浸つてしまふ。写真一32のヴィジェ・ル・ブラン(Vigée Lebrun, 1755 - 1842) の『画家の自画像』には、聖母子にかわるうつそみの母子の肖像が、甘美な情愛を湛えて描かれている。写真一33はフラゴナール(Jean

► 33 フラゴナール『教育こそすべて』



► 32 ヴィジュールグラン『画家の自画像』



Honoré Fragonard, 1732–1806) の『教育こそすべて』

と題する絵である。風刺的ではあるが、かのエラスムスの思想を彷彿とさせるものがある。また、ルソーの『H

ミール』の思想に影響された絵画でもあるといえよう。

写真一 34 A・B・Cも同じくフラゴナールのものであ

►34 A フラゴナール



►34 B フラゴナール



る。固有の性の露な表現、子どもとともにいる母親の至福に満ちた姿は、ルソーの思想と通ずるものがあると同時に、ロココの本質的な精神である「生きる歓び」を謳いあげている。ところで、十八世紀のフランス絵画といえばロココ様式の全盛期であり、これらの画家たちも、

►34 C フラゴナール



ロココを代表する画家ではあるが、ここにあげた絵には、ロココ趣味を超えた人間精神の輝きがみられる。ロココとはそもそも独立的な様式ではなく、バロックの延長であり、その「戯れ (Playful)」の精神は、ロマン主義の萌芽なのである。

写真—35は、フランス・ロマン派の画家、ブイヨン

►35 ブイヨン『子どもの運命の女神』

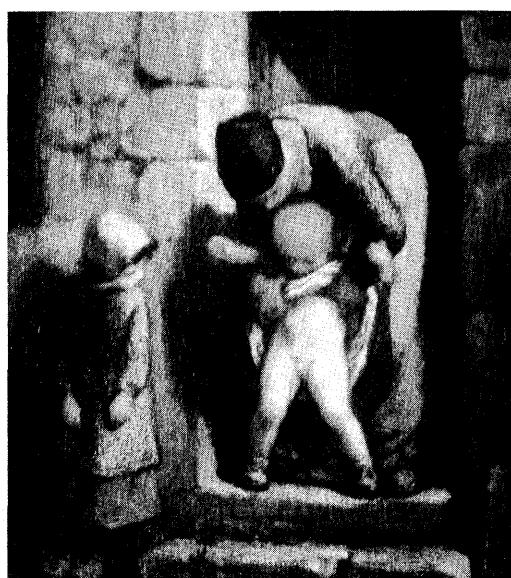


(Pierre Bouillon, 1776 – 1831) の『子どもの運命の女神』一八〇一年作の絵である。遊びに疲れた子どもが眠つてゐる井戸の縁には、わきまでも子どもが興じていた、骨お手玉、やわれた鳥の翅、占い遊びのディジーの花びらばつてゐる。骨お手玉は、古代ギリシア以来

▼36 ▶△一



▲37 ▶△一



の遊びである。ドイツ・ロマン派の詩人シラー (Friedrich von Schiller, 1759 – 1805) が、「子どもの遊びには高い意味がある。」といたい、それを受けてフレーベルが、「遊びに倦み疲れて眠つてゐるおとなな子ほど美しいものはない。」と賞賛しているが、まさにそれ

いの言葉を彷彿とさせる、美しい子どもの絵である。

フランスには、これ以降、ルソーの自然主義・ロマン主義の流れを汲む画家たちがバルビゾンの村に住み、バルビゾン派を形成していくのであるが、なかでも、写真

—36・37・38のミレー (Jean François Millet, 1814—

75) は、真摯にして素朴な農村の子育ての場面を敬虔に

描いている。それは平和と静謐を湛え、母の慈愛と健健康な幼児の肌の温もりまで伝わってきそうなロマンにみちた絵である。それは聖母子画に代わるうつそみの母と子の頌歌であるといえよう。

——（以下く）——

(浪速短期大学)



▲38 ミレー